

応用生物科学部平成 19 年度後学期学生による授業評価の分析結果

平成 20 年 3 月 31 日
自己点検評価委員会
委員長 柵木利昭

応用生物科学部自己点検評価委員会では、学部教育の更なる改善のため学生による授業評価を実施しました。その評価の分析結果を報告いたします。

今後、これらの評価をもとに、教員の授業内容の改善活動につなげ、アンケート内容や回答方法の見なおし、教育カリキュラムを充実し、教職員による授業改善活動を継続的に行っていく所存です。分析結果をお読みいただき、ご意見・ご要望がありましたら、学部までお寄せくだされば幸いです。

分析結果の概要

1. 回収率について

学部全体で対象学生 897 名中 795 名がアンケートに回答し、回答率は 84.6%であり 18 年度前学期の 882 名中 661 名 (74.9%) や後学期の 877 名中 659 名 (75.1%) より 10 ポイント上昇した(表 - 1)。17 年度からは講義最終日等の時間中にアンケートを配布し、その場で回収するなど回収方法を改善した結果、16 年度の学生自身がポストに投函する方法(16 年度後学期の回収率 32%)に比べ、高い回収率となったと考えられる。回収率は毎学期ごとに上昇し講義のほとんどない 4 年生の 1 部のコースで回収率が低かったが、獣医課程 1 年と 2 年及び生産環境学課程応用動物学コース 3 年の回収率 100%など、いずれの課程・コースも 73%以上の極めて高い回収率を示した。この高回収率は各課程長及び学務委員のご協力の賜物である。

表－1

平成19年度後学期学部授業評価アンケートの回収枚数一覧							
課程・学科	コース	学年	回収枚数	回収率	対象の学生	在籍者数	対象外 (休学等)
食品生命		1	75	90.36%	83	84	1
生産環境		1	81	96.43%	84	85	1
獣医		1	29	100.00%	29	29	
食品生命		2	82	97.62%	84	84	
生産環境		2	67	80.72%	83	83	
獣医		2	28	100.00%	28	28	
食品生命	食品	3	49	96.08%	51	51	
食品生命	分子生命	3	34	79.07%	43	44	1
生産環境	植物	3	19	73.08%	26	26	
生産環境	動物	3	30	100.00%	30	30	
生産環境	環境生態	3	33	91.67%	36	36	
獣医		3	30	78.95%	38	38	
食品生命	食品	4	66	81.48%	42	43	1
食品生命	分子生命	4			39	39	
生産環境	植物	4	10	34.48%	29	29	
生産環境	動物	4	16	64.00%	25	25	
生産環境	環境生態	4	27	65.85%	41	41	
獣医		4	30	93.75%	32	33	1
V		5	25	83.33%	30	30	
V		6	28	90.32%	31	31	
	合計		759	84.62%	897	905	8

2. 評価科目、評価項目等について

評価の対象とした項目は 16、17、18 年度と全く同じもので①授業の目的、主題が明確で全体が体系付けられていましたか、②理解しやすくするために資料等に配慮、工夫されてましたか、③話し方、板書の仕方は適切でしたか、④質問のしやすさ、予習・復習の指導は適切でしたか、⑤教員が熱意を持っていると感じましたか、⑥授業の内容は興味あるものでしたか、の 6 項目である。それぞれの項目を 1 (劣) から 5 (優) まで 5 段階で評価した。

教養基礎科目 9 科目、専門科目の合計 152 科目の合計 161 科目を調査対象とした。その内訳は 121 科目が講義、40 科目が実習、実験および演習である。受講者の人数が 100 名を超える科目は僅か 3 科目 (1.8%) で、99~50 名が 40 科目 (24.8%)、49 名以下が 118 科目 (73.3%) であり 1 科目あたり受講者の人数はほぼ適正と思われる。教養基礎科目のうち、化学Ⅱは 2 つの教室 (67~76 名) に、生物学Ⅱは 3 つの教室 (69~78 名) に分割し、それぞれ 100 名を超える大人数の受講者にならないよう配慮した結果である。

3. 総合点の概要

応用生物学部獣医学課程を除く食品生命学課程と生産環境学課程の学生が年次進行で 4 年次生になり開講科目が大幅に 17 年度や 18 年度とは異なっているので一概に比べることはできないが、平成 19 年度後学期の全授業科目 161 科目の総合点 (表-2) の平均は前学期の 3.79 とほぼ同じ 3.77 であり、18 年度前学期の 3.67 や後学期の 3.61 より僅かではあるが上昇し、改善傾向を示している。特に、総合点が 4 点以上の極めて高い評価を受けた科目は 51 科目 (31.7%) であり、18 年度後学期 32 科目 (21.1%) に比べその割合が 10.6 ポイントも上昇した。一方、3 点未満の低い評価を受けた科目は僅か 9 科目 (5.6%) であり 18 年度後学期 12 科目 (7.9%) より 2.3 ポイント少なくなった。その結果、101 科目 (62.7%) は 3 点台の評価を受け、18 年度後学期の 108 科目 (71.1%) に比べ減少する傾

向が見られた（表-2、図-1,2,3）。

総合点4以上を、課程ごとに見ると食品生命学課程（2コース）は開講40科目中12科目（30%）、生産環境学課程（3コース）は75科目中24科目（32%）及び獣医学課程は開講37科目中17科目（35%）であり、課程による変化は少ない。

表-2. 講義と実習等の総合評価

総合点	3.00未満	3.00～3.99	4.00以上	計
講義	9科目（7.5%）	79科目（65.8%）	32科目（26.7%）	120科目
実習等	0（0）	22（53.7）	19（46.3）	41
合計	9（5.6）	101（62.7）	51（31.7）	161

*実習等にはセミナー・実験・演習を含む

実習等が高い評価を受けていた17年度後学期（43%が4点以上）や18年度前学期（56%が4点以上）に比べ、18年度後学期は半減し僅か18.4%が4点以上の高い評価を受けたに過ぎなかったが、19年度後学期は3点未満は見られず、46.3%が4点以上の高い評価がみられた。

3科目が受講者数100名を超えたが、その総合評価は4.20（177名）、3.34（127名）、2.92（124名）と割れ、大人数科目でも高い評価を受けている科目もある。

総合評価3点未満が9科目（5.6%）あるが、いずれの科目も1人で担当しておりその内3科目は非常勤講師であり、受講者が多いのは教養基礎科目の2科目（124人、76人）のみで他の7科目（専門科目）の受講者は10人ないし46人である。必ずしも大人数クラスが総合評価に悪い影響を与えるとは言えない。

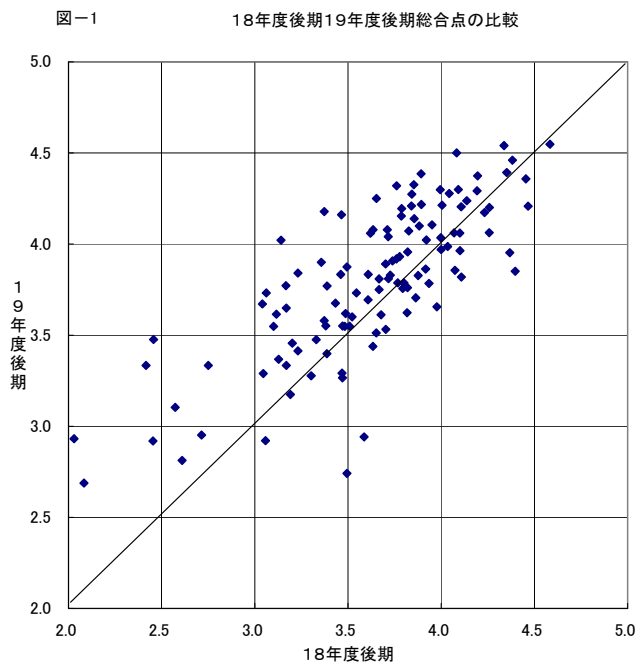
総合点が3点台の科目の中には、全ての項目を1点と評価する学生がいる一方で、全て

の項目を 5 点と評価する学生も見られなど評価が割れる場合が見受けられる。このような科目においては、教室の中に授業に満足する学生とそうでない学生が混在していることが伺われる。

また、食品生命学課程において総合点 4 点以上が 10 科目あり、その内の 5 科目は受講生 87～94 名の大人数科目であり、さらに、受講生 80 人以上は 12 科目ありその内 5 科目が総合点が 4 点以上であり受講生の数と総合評価との間には関連がない様である。

4. 総合点の平成 18 年度と 19 年度の比較

平成 19 年度後学期開講 161 科目の中で 18 年度後学期にも開講していた 118 科目について総合点を比較した（図 - 1）。



118 科目中 82 科目（69.5%）は総合点が 18 年度に比較し上昇した。ちなみに、18 年度後学期は 56 科目中 34 科目（60.7%）、19 年度前学期は 110 科目中 63 科目（57.3%）総合点

が上昇したが、19年度後学期はこれらより9ないし12ポイントも上昇率が高く改善傾向が一層強く見られるようになった。

個別の科目では、1点近く上昇した科目もあるが、ほとんどの科目が0.5点以内で増減している。18年度後学期は総合点4以上の高い評価を受けた科目は27科目（118科目中22.9%）であったのに対し19年度は42科目（35.6%）と大幅に増加した。特に、18年度に総合点が4点以上の27科目中20科目は19年度も4点以上の評価で2年連続で総合点が4点を上回っており、恒常的に高い評価が安定して得られている。その中でも特筆すべきは、動物系統学、保全生態学、獣医生理学Ⅱ、獣医生化学Ⅰ、獣医薬理学Ⅱ、獣医内科学Ⅰ、フィールド科学実習Ⅲ及び獣医病理学実習Ⅰの8科目は2年連続して4.2点以上の極めて高い評価を得ている。その一方で、19年度後学期において、5科目ではあるが2年連続で総合点が3点を下回っていた5科目を含め、9科目が3点未満であったが、そのいずれの科目も前年度より0.9ないし0.2ポイント上昇しており改善傾向が見られた。

18年度総合点が3.5以上4点未満の平均的な評価の48科目中35科目（72.9%）の19年度評価が前年度より上昇した。特記すべきは、18年度総合点が3点以上3.5点未満の比較的評価の低かった33科目中26科目（78.8%）は19年度は点数が上昇し、そのうち20科目（60.6%）は3.5点以上を示し総合点は大幅に改善された。また、18年度において総合評価が3点台の科目の中で19年度に評価が下がった20科目（24.7%）についても2科目を除いてそれぞれ0.2ないし0.3点とごく僅かしか下がらなかった。これらのことから、学生による授業評価が3年目になり、受講開始時の受講生の学習レベルを開講時に充分把握したうえで、教員の授業内容や教育力の弛まない改善努力が定着してきたことが伺える。

5. 学生からのコメントの概要について

教養基礎科目9科目（100%）に40項目、専門科目82科目（53.9%）に187項目の合計89科目に227項目とさらに科目名の不記載の36項目を加え263項目のコメントが寄せ

られた。19年度前学期の426項目に比べるとかなり少なくなった。後学期は前学期に比べコメント数が減少する傾向は17年度、18年度にも見られた。17年度前及び後学期、18年度前学期等と比べ19年度前学期と同様に全体的に「生理的嫌悪感を覚える」などの厳しい個人攻撃的な記載は見られなくなったが、授業を聞いていたとは思えないような、授業内容と全く異なる的外れのコメントを記載する者もまれではあるが見受けられる。

コメントの内容の主なものは賛否を含め授業内容に関するもの111件、授業スピードに関するものが12件、授業編成に関するもの28件、パワーポイント、プリント、AIMSによる資料提示に関するもの37件、板書に関するものが21件、声が小さいなど話し方に関するもの13件、複数教員による連携不足等に関するもの5件などであり、18年度後学期とほとんど同じ傾向である。その中身はポジティブ（よく理解できた、要望等）なものよりネガティブ（批判的、否定的等）なものが多い。しかし、教養基礎科目において生物学や物理学において未履修科目の開設、学年によって授業開講数にばらつきがあるなど授業編成、資料等をAIMSへの公開、シラバスと授業内容を一致、講義・実習の準備の徹底、関連科目との内容分担を協議して欲しい、受講者数にあった広さの講義室、複数教員担当科目は教員ごとに授業アンケートするべき等の提案や要望も多数寄せられている。

4点台の評価を受けた科目への学生からのコメントの実数は比較的少なかったが、その主なものは、熱意は素晴らしかった、具体的な例をあげ理解しやすかった、毎回小テストを行いよく理解できた、チュートリアル方式は緊張感があり良かった、公務員試験の過去問の演習は良い勉強になった、外へ出での講義分かりやすかった、自然保護について色々考えさせられる授業だった、前半の知識を活かしての発表会は理解しやすかった、実用的内容が多く有意義であった、講義と実習のバランスが良かった等のポジティブなものであり、授業に対する満足度が高いことが伺われる。

17年度後学期の受講生29名中21名（72%）、42名中15名（36%）のような1科目に集中してコメントが寄せられる傾向にはなかった。

6. まとめ

「好き」か「嫌い」かで評価し全ての項目を1点とする、いわゆる「他人を見下す学生たち」が少数ではあるが混じっているが、自由記述欄に17年度や18年度に見られたような大学生が書いたとは思えない個人攻撃は19年度前学期と同様ほとんど見られなくなった。

授業評価そのものに関して、学年進行で授業科目が大幅に変更されているので、一概に前年度とは比較はできないが、学部全体の総合点は3.77と前年度に比べ0.1ポイント上昇し、また、118科目中82科目(70%)は総合点が18年度に比較し上昇した。学生による授業評価による授業改善活動が4年目になり、教員の授業内容や教育力の弛まない改善努力が定着してきたことが伺える。教育は決して学生の顔色を伺ってするものではないが、受講開始時の受講生の多様な学習レベルを充分把握したうえで、上記のような学生からの評価の高い講義、実習等を各自の授業改善の参考にし、高い目標を掲げ熱意を持って、さらに授業を楽しんで行う事が大切である。

授業評価アンケートに評価がどのように活かされるか明確に示されておらず、実感としてはこのアンケートは意味がないとか、あるいは、授業編成など各種の建設的な提案や要望が寄せられる等、自己点検委員会としてより綿密に対応し、今後の授業評価にこれらの声を活かしていく必要がある。

図-2

平成19年度後期受講者数と総合評価

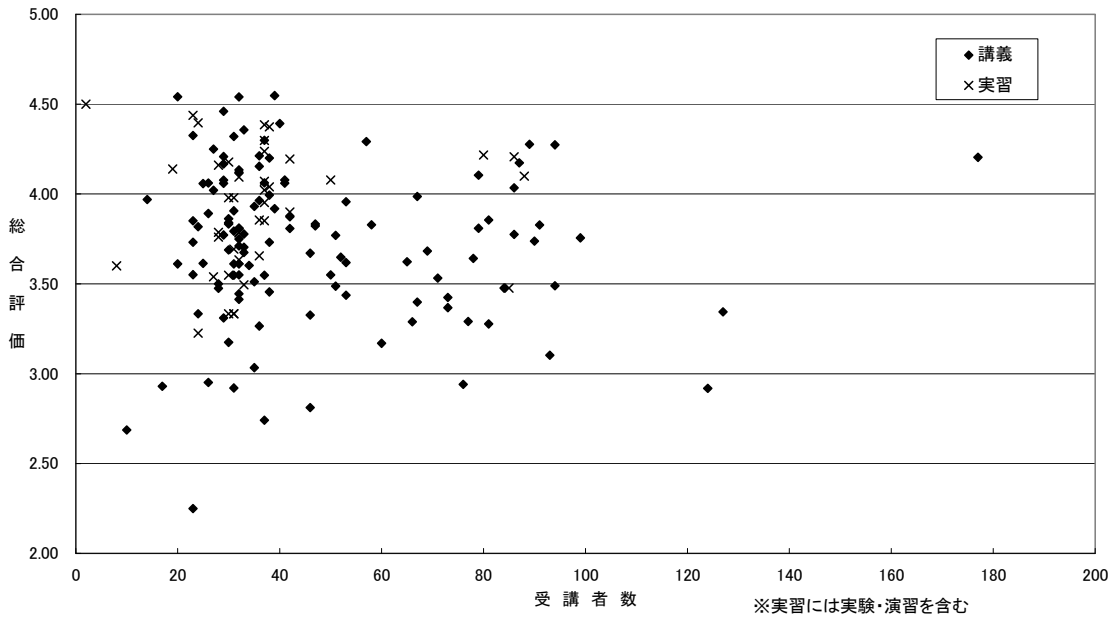


図-3

平成19年度後期各課程別受講者数と総合評価

